

アッケシソウの保存と活用について
～文化遺産の保護思想の普及啓発に伴う人工栽培計画～

教育委員会海事記念館

■これまでの経過

アッケシソウは、明治24年、発見地に因んで北海道大学宮部金吾博士により名付けられ、「厚岸湖牡蠣島植物群落」の中の一種として、大正10年に国の天然記念物に指定された。その後、地震や地盤沈下等の自然環境の変化に伴い、牡蠣島は水没し植物群落の回復が見込めないことから平成6年に指定解除となった。その際、当時の文化財審議会からアッケシソウについては町の名が付いた唯一の植物なので、今後とも保護に務めるよう提案があった。

その一方で、厚岸町教育委員会では、昭和53年から約20年間継続して厚岸湖岸のアッケシソウ分布調査を実施してきた。これにより、金田崎地区、金田崎～トキタイ川右岸地区、トキタイ川左岸～猫の沢地区、猫の沢～東梅川右岸地区、東梅川左岸～東梅地区にかけてアッケシソウが分布していることを確認した。また、北海道教育大学釧路校神田教授（当時）等により平成13年から4年間実施された植生調査でも同様な分布状況が報告されている。

現在は、平成26年度より、隔年にて調査を実施しており、直近では、本年（平成30年）10月17日に実施し、その生育状況の把握に努めているところである。若干ではあるが植生変化を生じている箇所や他の植物の繁殖、地形の変化など、いくつかの不安要素も確認されている。

また、アッケシソウの人工栽培も実施してきた。

■厚岸湖岸調査結果の推移

①平成19年～22年：金田崎地区の分布調査を実施

湖岸汀線の堤防状に発達した部分が浸食により一部決壊し浸水域が増加していることと、イネ科やカヤツリグサ科等の他の塩性植物の繁茂によりアッケシソウの生育分布が減少し、生育不良となっていた。

以降は平成26年度より隔年にて調査を実施

②平成28年度の調査結果

調査カ所：厚岸湖岸の3箇所（a. 金田崎～金田沢周辺、b. 東梅川河口（右岸・左岸）地区、c. 猫の沢～トキタイ川左岸地区）

各地域でアッケシソウの生育は確認しているが、湖岸縁の湿地の形状が変化している、天候により、調査確認できなかった地点もある。

平成26年度と28年度を比較すると、その植生に大きな変動はなかったものの、若干ではあるが植生変化を生じている箇所や他の植物の繁殖、地形の変化など、いくつかの不安要素も確認されている。

■人口栽培の推移

①昭和56年

厚岸湖岸トキタイ地区へ移植を開始し、昭和57年から郷土館前庭での試験栽培

②平成4年

チカラコタン地区での試験栽培へと進むが、チカラコタン地区については、沢水の流入や土壤改良が難しかったこと等で思わしい結果が得られなかつた。

③平成18年

上記の状況を開けるとともに、町民や観光客が訪れやすい市街地の一画（港町試験栽培地）で試験栽培（1区画（300m²））を開始し良好な結果が得られた。

④平成19年

区画を4区画（計1,200m²）に増やし栽培を行つた（造成は建設課、浚渫土搬入は町内業者協力）。

この年は前年度（平成18年）生育の良かった場所は生育不良となつたが、新たに造成した3区画については、順調な生育であつた。

⑤平成20年

雑草の繁茂が目立つてきたため、教育委員会職員の協力を得て雑草駆除を実施したが、海水散布の時間が思うように取れず、雑草が繁茂する中でアッケシソウが生育しているという状況だったため、平成21年度に町内業者の協力を得て浚渫土の嵩上げを実施した。

⑥平成22年

土壤入れ替えにより生育が順調に進むものと思われたが、海水散布及び雑草駆除の回数が少なく土壤も酸性を示していたため4区画とも生育は少なかつた。

⑦平成23年

土壤分析で土壤が酸性を示している結果を踏まえ、条件を変えながら消石灰による中和及び施肥を実施した。消石灰及び肥料を投入した区画が一番生育が良かったが、海水散布及び雑草駆除の回数が少なく、全体的に雑草の繁茂が著しかつた。

⑧平成24年

平成23年の土壤分析により、中性を示した一区画と生育が順調だったもう一区画の

計2区画で栽培を実施したものの、全体的に雑草の繁茂が著しくなった。

港町の栽培地については雑草の繁茂が著しく、駆除することが困難なことや、海水撒布のポンプアップに多大の労力や時間を要するため、継続栽培は困難と判断し全面休耕とした。

⑨平成25年度

海事記念館前町民広場でプランター16個による試験栽培を実施。

各プランターは、浚渫土・黒土、堆肥投入・堆肥未投入、海水・水道水・水道水で希釈した液肥など条件を変えて栽培した。

生育結果は、土壤及び水質では余り変化が見られず、堆肥の有無や液肥の有無により生育が大きく左右されることが判明し、密集すると枝の張りが少なくなるため、適度の間引きが必要であることが推測された。

⑩平成26年度以降

前年度の結果を受け、引き続き町民広場でのプランターによる試験栽培を継続して実施することとし、以後平成30年度まで、プランター数を増やしながら試験栽培を実施している（平成30年度はプランター40個）。

⑪郷土館前の栽培地（約6.5m²）

栽培面積が狭く郷土館敷地ということもあり、雑草駆除や海水散布が頻繁に行えるため管理がしやすく、毎年春先に耕運・播種し、秋に種子採取を行っている。ここ数年は土壤分析でもpHが中性を示しており、生育状況は良好に推移している。

しかし、以上のように長年取り組んできたものの、アッケシソウの種の採取や消滅を防ぐことを第一義にしてきたことにより、広く町民や観光客にPRする点では不十分であると言わざるを得ない状況にあった。

■今後の方向性について

アッケシソウの人工栽培事業は、最終的にはアッケシソウの育つ環境を守り、育てるという、野生の保全に繋がっていく事業であると捉えており、町民にアッケシソウが理解され、さらには町外から訪れる観光客の興味関心につながることが大切である。

1) アッケシソウの保存と活用の目的

厚岸町の名前を冠した植物“アッケシソウ”を野生で保全すること

2) 方法

A. 自生地（厚岸湖岸）における対策

B. 自生地以外（造成地等）の土地を活用した対策

3) 保全活動の順序

関係機関と協力し、且つ専門家（北方環境研究所神田房行所長、東京農業大学中村隆俊准教授）の指導を仰ぐとともに、釧路湿原の再生事業やその他環境整備事業に精通している環境コンサルタント株式会社の協力を得て手順や具体策を構築し、事業を推進する。

●今後のアッケシソウ栽培事業についての構想・計画

①事前調査（水質調査など）

アッケシソウの人口栽培地として現在検討している候補地が適地かどうかを判断するため、隣接する尾幌川の水質や流量観測（干満の差で流量が変動するため）、地下水の塩分濃度・地下水位などを確認する事前調査が急務であるため、本年度事前調査を実施。

②試験栽培

事前調査の結果を踏まえ、栽培候補地においていくつかの条件下（異なる種類の土壤や水分の供給方法など）でアッケシソウを栽培し、適した栽培方法を得るための試験期間とする。

③整備事業

本格的な事業実施とし、栽培区画を段階的に増やしていき、土壤の成分変化（酸性化の度合い）などのモニタリング調査も実施する。

【添付資料】 ■資料A 「栽培候補地航空写真」

■資料B 「厚岸湖岸調査地図」



